

# 怪物の言説、言説の怪物

——バタイユ『ジル・ド・レ裁判』序文における歴史記述の侵襲的性格をめぐって——

吉田隼人

## シャルティスト＝バタイユ

ジョルジュ・バタイユが国立古文書学校 (École nationale des chartes) の卒業生、すなわちシャルティスト (chartiste) だということは周知の事実である。学業を終えてから、ごく短い一時期を除いて、彼は一生のほとんどをその資格でもって図書館員として過ごした。そのキャリアの初期においては『アレチューズ』誌には当時の専門だった古銭学の論文を執筆し、また『ドキュマン』誌を皮切りに、歴史的な題材を扱いながらもバタイユならではの独自性が刻印されたテキストを最晩年 (1959年) の『ジル・ド・レ裁判』に至るまで発表しつづけてきた。本稿ではその『ジル・ド・レ裁判』のうちバタイユ自身の筆になる序文「ジル・ド・レの悲劇」において、それ以前のテキストに見られたバタイユの歴史記述に特有の異様さ——西谷修の言葉を借りるなら「怪物」性<sup>(1)</sup>——がどのようにあらわれるのか検討する。そこでまず第一節ではシャルティストとしてバタイユの後輩にあたるピエール・サヴィとジャン＝ピエール・ル・ブーレの二人による論文を手掛かりに、バタイユが古文書学校の卒業論文から『ジル・ド・レ裁判』に至るまで、とりわけ「中世」についていかなるテキストをものしてきたのか概観するとともに、その集大成とも言うべき『ジル・ド・レ裁判』が歴史記述という点でどのように位置付けられうるテキストなのか見てみよう。

ル・ブーレの論文「ジョルジュ・バタイユ、中世と騎士道」<sup>(2)</sup>は、ドゥニ・オリエによるバタイユのプレイヤッド版『小説と物語』の序文や、古文書学校の同窓だったアンドレ・マッソンによるバタイユへの追悼文などを出発点に、バタイユの「騎士道」観に変遷があったか、それとも連続性をもったものだったか、という問題を主軸として、副題のとおり「古文書学校の卒業論文から『ジル・ド・レ裁判』まで」の様々なテキストを取り上げて、そこに通底するものを見出そうとするものである。取り上げられた順にテキストを挙げていけば、古文書学校の卒業論文「騎士の位階」(1922年)に始まり、『ドキュマン』第2号に発表された「サン＝スヴェの黙示録」(1929年)、「ヒトラーとチュートニックな秩序」(1939年)、ピエール・プレヴォ宛て書簡二通(1946年)、「イスラムの意味」(1948年)、「中世フランス文学、騎士道道徳と情熱」(1949年)、そ

して1959年の『ジル・ド・レ裁判』序文、となる。ル・ブーレはこれらのテキストを一貫したパースペクティヴのもとに置いて眺め直すことで、オリエの序文に見られるおおよそ以下のような見解に対する反駁を試みる。

バタイユの「中世への関心」について、ドゥニ・オリエは「変貌」とさえ言い、またその時期を位置付けている。彼は書く。「こう考えられる。中世に対する彼の関心はその色彩を変えたのは、つまり彼が騎士道文学のキリスト教化された中世から、原始的で異教的で血に飢えた中世へと移行したのは、卒業論文の口頭試問の翌日（“ほとんど学校を出る頃”）なのだと<sup>③</sup>」。

マッソンの追悼文などにもあらわれている、古文書学校入学前と卒業後のバタイユの中世観の「変貌」という見解を、ル・ブーレはバタイユの著作はもちろんのこと、彼が古文書学校の入学前後に読んでいたとされるレオン・ゴージェやレミ・ド・グールモンなどの著作も含め、たくさんのテキストを取り上げながら訂正していく。すなわち、「騎士道文学のキリスト教化された中世」から「原始的で異教的で血に飢えた中世」への「移行」があったのではなく、最初からバタイユの騎士道観には前者のような理想主義の位相と後者のような（当時の）現実の位相とが併存していたのだと。そのなかでいかにして後者の「原始的で異教的で血に飢えた中世」が前景化してきたのかを跡づけるのがル・ブーレの狙いなのだが、ここでは本筋と関係ないので彼の議論を追うことはしない。バタイユがシャルティストとなるその最初のテキストだった卒業論文「騎士の位階」から——あるいは彼が古文書学校に入学するきっかけの一つだったというランスのノートル・ダム大聖堂をめぐる処女作から——最晩年の『ジル・ド・レ裁判』まで、ある「連続性（*continuité*）」を有したまま歴史にかかわるテキストを発表しつづけてきたのだということさえ確認できれば十分である。

ピエール・サヴィの論文「歴史における『裁判』、『裁判』における歴史<sup>④</sup>」は、とりわけその最晩年の『ジル・ド・レ裁判』を、より厳密な歴史学の立場からその評価について検討し、ジル・ド・レ研究史におけるさまざまな著作と比較した上で、最終的な位置付けを試みている。

バタイユ以前のジル・ド・レ研究史としては、バタイユもまとめている同時代の記録を始めとして、ヴォルテールによる擁護的な言及や、ユイスマンスやバタイユも大きく依拠したウージェーヌ・ボッサール神父による画期的な伝記研究（1885年）、ドレフェス事件との関係でジル・ド・レ名誉回復の論陣を張ったサロモン・レイナック（Salomon Reinach）、ルドヴィコ・ヘルナンデス（Ludovico Hernandez）の筆名を用いたフェルナン・フルーレ（Fernand Fleuret）、一種の悪魔主義の立場から1930年にジル・ド・レ擁護を試みたアレクスター・クロウリー（Aleister Crowley）などが概略的に紹介される。

そのうえで、著作の大半を占める裁判記録の本文校訂を行ったバタイユと、その現代フランス語訳を担当したピエール・クロソフスキーとの連名で取り上げられる『ジル・ド・レ裁判』は、「最

初の確固たる版」ではあるが「現代フランス語による」ために「今日もなお原語（ラテン語と中世フランス語）による裁判の科学的な版は欠けている」との評価を下されている<sup>(5)</sup>。またこの著作が歴史家の領分に取り上げられにくい理由として、初版が「*beaux livres*」の出版を主とするフランス図書クラブ（*Club français du livre*）から刊行され、たとえ科学的な価値があるとしても「大学的な著作の刊行というよりはむしろ『稀覯本』としての刊行」と見做されたことも挙げられている。初版から6年後に再版されたのもポルノグラフィックな文学作品を多数刊行した出版社のイメージが強いポヴェール書店であり、その後もガリマール版バタイユ全集に収録され、普及版としても歴史家には馴染みのない10/18叢書で刊行されたことと併せて、「歴史出版に通じており、そうした出版社として知られている」書肆から刊行されなかったことが、この著作が「専門家」に届くのを阻んだ大きな要因だと、サヴィは考察している<sup>(6)</sup>。だが、翻訳や出版社といった問題以上にサヴィが重視するのは、『ジル・ド・レ裁判』における以下のような特徴である。

バタイユはジルの歴史を書くうえでさらに文学的な諸形態を借りている。それゆえ我々はジル・ド・レを「芝居の登場人物」だとして読むのだし、またそれ以降は何度にもわたってジルの「悲劇」が問題とされることになるはずだ。要するに、伝説ないしは演劇の方へと向かっているために、我々は歴史の領域の外にあるということである<sup>(7)</sup>。

ジル・ド・レという人物の歴史を感情移入によって文学的、あるいは演劇的に描き出したために、バタイユは「科学的」な歴史の領域をはみ出してしまった、というのがサヴィの最大の主張である<sup>(8)</sup>。これは単なる否定の言辞ではなくて、このテキストはバタイユやクロソウスキーの他の著作と同様、歴史の領域のみならず文学や哲学の領域とも交差しており、その点でいくつも新たな知見を有しているということもサヴィは丁寧に指摘している<sup>(9)</sup>。しかし、この著作が多くの外国語に翻訳されるほどに可読的（*lisible*）であり、さらに明晰（*clair*）かつ利用が容易（*accessible*）でありながら決して通俗的（*banal*）ではないという点を評価しつつも、あくまでサヴィは、これが科学的な歴史研究の場にはそぐわない「規格外（*extraordinaire*）」の著書であり、たとえ書誌にその書名が含まれていても『ジル・ド・レ裁判』においてバタイユの提示した様々な *idée* は論じられることがない、とこの論を結んでいる<sup>(10)</sup>。

こうしてバタイユ、とりわけその『ジル・ド・レ裁判』を取り上げた二つの論文について概略を見てきて、最低限確認しておきたいのは次の二点である。まず、ル・ブーレの論文にあったように、バタイユが古文書学校入学前後から一定の「連続性」をもって歴史に関するテキストを執筆、発表してきたという点。それから、サヴィが論じた『ジル・ド・レ裁判』に代表されるように、バタイユの歴史に関するテキストには常に歴史学の領域をはみ出すような運動があったという点。

次節ではこの二点を踏まえて、『ジル・ド・レ裁判』序文におけるバタイユの歴史記述がいかにして厳密な歴史学の領域をはみ出して、あるいは侵犯していくのか、その「怪物的」な運動につい

て見ていきたいと思う。

## 歴史記述あるいはその侵犯

前節で取り上げたサヴィは『ジル・ド・レ裁判』が科学的な歴史の領域を逸脱して文学の領域へとみ出していることについて、バタイユの読みが他の歴史家と区別されるのは、「真理、証拠、再構成に関わる歴史家の立場が、彼のエクリチュールにおいては主題と想像力の領分である」点によってであるとし、その顕著な例として、ジル・ド・レと彼が雇った錬金術師フランチェスコ・プレラッティとの同性愛関係を、どちらが *actif* でどちらが *passif* であったかという点に至るまで想像で記述した部分を挙げている<sup>(11)</sup>。

ドゥニ・オリエは『ジル・ド・レ裁判』を論じた文章のなかで、この序文というテキストにおいて「*peut-être*», « *sans doute* », « *nous pouvons imaginer que...* » といった推量表現が頻出することを取り上げ、こうした表現が「ニュートラルな非=不可能性を積極的な可能性へと変容せしめる」役割を果たしているとする<sup>(12)</sup>。実際に序文のテキストにあたってみると、この種の表現が頻出する場所はジル・ド・レについて概括的に描写する第1章、オリエが取り上げている第11章（これについては後述）、そしてプレラッティをはじめとする手下たちとの性的なものも含めた関係について記述した第16章に限られている。

友人として、そして（我々にはそれを確かだということはできないが）たぶん愛人として扱われた、フランソワ・プレラッティは最初から早くも、失敗を帰結させる悪魔の頑固さに取りみだすというようなことは少しもなしに、[悪魔の] 召喚を多く行った<sup>(13)</sup>。

第16章の冒頭に見られるこの一文では「たぶん愛人として (*peut-être en amant*)」という一節がサヴィならびにオリエの指摘に当てはまる。同じ « *peut-être* » という表現はさらに第16章から拾うことができる。

アンリエとポワトゥは、より若いので、たぶん何らかの魅力を有していただろう。彼らの性向は快活であるし……、とりわけ、ジルの愛人であったポワトゥが美男だったことを我々は知っている。だがこれらの少年は田舎者であって、他方、たぶんその主人から寵愛を受けていたであろうプレラッティのほうは、彼、すなわちジル・ド・レに、自分の教養に起因する満足を与えていたと考えるのが道理である<sup>(14)</sup>。

仮に「たぶん」と敢えて訳出した « *peut-être* » という表現が、ここでは二度にわたって、しかも手下とジルとの同性愛的な関係を描出するのに用いられていることがわかる。この章には他にも « *Il est probable que...* », « *Nous imaginons aisément...* » といった推量表現が見られるが<sup>(15)</sup>、これらも

直接的な性関係ではなくとも、プレラッティの手引きのもとジル・ド・レが少年の誘拐、陵辱、虐殺といった犯罪に手を染めはじめ、次第に熱狂していく様を想像力によって描く文章である。この第16章と並んで推量表現が頻出する第1章にあっても、そうした表現が用いられるのは、やはり以下のような文章においてである。

恐らく、彼は犠牲者の腹の上に座ってこうしたやり方で、自分を慰め、死にゆく者の上に子種を撒き散らしたのだらう。だが彼にとって重要だったのは性的に享樂することよりも死が実演されるのを見ることだった<sup>(16)</sup>。

現代の読者がジル・ド・レという人物に接するにあたって最も興味を引かれるのは、当然ながら上述のような男色趣味と大量の少年を虐殺したという性犯罪の側面である。こうした側面を想像力に頼って補完し、強調したのはもちろんバタイユというエロティシズムの思想家ならではということになるが、しかしこの種の「科学的な」歴史記述からの逸脱、あるいは侵犯というのは、バタイユに限ったものではない。ジャン＝マリー・シェフェールは『なぜフィクションか?』のなかで、ケーテ・ハンプルガーの議論を巧みに援用しながら、フィクション的な言表と事実とに即した(factuel)言表とが相互浸透的であることを示すため、歴史家による第三者の叙述にあっても様々な「フィクション性の指標(indices de fictionnalité)」が見られることを、スエトニウス『皇帝伝』の一部を取り上げて実証してみせている<sup>(17)</sup>。歴史記述には往々にしてこの種の虚構＝フィクションが侵入しようということに関しては、野家啓一も、国文学者・野口武彦による「虚構記号」という、オリエが『ジル・ド・レ裁判』の文体について指摘した推量表現や、シェフェールのいう「フィクション性の指標」に相当する日本語表現について触れた上で<sup>(18)</sup>、以下のように述べている。

それゆえ、現実組織と虚構組織との間には、鼠一匹通さない厳密な国境線が引かれているわけではない。現実組織の中にも、ある種の歴史上の人物(神武天皇やロムルス・レムルス兄弟)や未来の出来事のように虚構組織と境を接している存在もあれば、「フロギストン」のようにかつては現実組織の中で華々しい活躍をしながらも、今は虚構組織の中で不遇を託っているもの、あるいは「光の粒子」のように一度は虚構組織へと放逐されながらも、「光子」に姿を変えて再び現実組織の中に返り咲いたものもある<sup>(19)</sup>。

自明のごとくフランス語の *histoire* という単語は「物語」と「歴史」の両方の意味を有しているのであるが、ヘイドン・ホワイトの言うように、現実の出来事は自らを語ることができず、ただ存在しているのみである以上、歴史は語り手(narrator)をもった物語(narrative)という、フィクションの世界としての形態をとらなくては記述されえない<sup>(20)</sup>。すなわち歴史は物語を離れて存在しえないのであって、バタイユの、とりわけ『ジル・ド・レ裁判』に見られるような「科学的」歴史記述を逸脱していくような言説もまた、想像力によってオリエの指摘するような推量表現という

「フィクション性の指標」ないしは「虚構記号」を導入しつつも、やはり一個の歴史記述であることに変わりはないのである。ただし、それが極めて特異な位相にある、カッコ付きの「歴史記述」であるのは言うまでもないことだが。

こうした歴史記述への「虚構記号」の導入のなかでも特にオリエが着目したのが、序文の第11章にある次のような記述であった。

このような部屋がシャントセの巨大な城塞の中に恐るべきことのため取り置かれた。たぶん彼の祖父はそこ（＝シャントセの城）で死んだばかりだったのではないか？ たぶん彼の祖父はそれより少しあとに死ぬに至ったのではないか<sup>(21)</sup>？

ジル・ド・レの裁判記録からわかるのは、彼が最初に罪を犯した（ものとして自供した）のが、彼の育ての親であり少なからぬ悪徳の持ち主であった彼の祖父ジャン・ド・クランの死と同じ年だったということだけである。ここで二度にわたって「*peut-être*」という推量表現＝「虚構記号」が用いられていることに着目して、オリエは以下のように言う。

これらの（＝ジル・ド・レの性犯罪を祖父の死と関連付けようとするバタイユの）要請は《小説化された伝記》という疑わしいジャンルより、バタイユの他のほとんど全てのテキストに見出されるような、そして「近親相姦的な死」とでも呼びうるものを様々なヴァリエーションを通して上演しているような、一連の同質な諸契機へと差し向けられるべきだ<sup>(22)</sup>。

オリエが着目したのは、ここでバタイユが伝記という歴史記述のなかにフィクション性の指標となりうる推量表現を用いてまで扱おうとした事項が「祖父の死」と「ジルの最初の性犯罪」との時系列的な順序の推定であり、彼の『眼球譚』や『息子』、あるいは『わが母』といった他の（小説的な）テキストに見られるような「近親相姦的な死（*mort incestueuse*）」の主題系であった。ここでバタイユが（オリエの考えによれば）自分の都合に良いように二つの出来事を順序立てて語った文は、アーサー・ダントーが『歴史の分析哲学』において提唱した「物語文（*narrative sentence*）」に相当する。物語文は「時間的に離れた少なくとも二つの出来事を指示する」、「一般的に過去の時制をとる」文であり<sup>(23)</sup>、「この構造は、行為を記述するため通常用いられる文のあらゆるクラスにあらわれる<sup>(24)</sup>」ものである。複数のセンテンスにまたがってはいるものの、オリエが取り上げた『ジル・ド・レ裁判』序文の一節は半過去で書かれ、祖父の死とジルの最初の性犯罪という二つの出来事を指示しているのだから、物語文の一種とみていいだろう。こうした物語文は、野家啓一によると「複数の出来事の間因果関係のコンテキストを設定する役割を果たす<sup>(25)</sup>」のだという。行為一般を記述することで因果関係を与え、歴史に登録するはずの「物語文」のなかに推量表現という「虚構記号」を混入させることで、バタイユは歴史記述を侵犯し、歴史＝物語を記述するという行為そのものが本来有していたフィクション性、あるいは——こう言ってよければ——怪物性と

いったものを明るみに出し、再度問いに付す。

歴史記述のなかに「フィクション性の指標」、あるいは「虚構記号」としての推量表現を混入させること、またその応用として物語文すなわち因果関係を改竄すること。こうした手段によってバタイユは、いったんはさも本業の歴史家のような手つきで「青髭」伝説<sup>(26)</sup>やユイスマンス『彼方』での描写<sup>(27)</sup>といった「仮面」からジル・ド・レという歴史的人物を解放してみせながら、実はその返す手で別の「仮面」を被せていたのだった。次節ではバタイユのこのような歴史記述を侵犯する特異な言説の在り方を、フーコーのニーチェ論、ドゥニ・オリエの『ランスのノートル・ダム』論、それに冒頭で少し触れた西谷修の「言説の怪物」というバタイユ論といった手掛かりに沿って少しく検討してみたい。

### 歴史のパロディ的用法——言説の怪物あるいは怪物の言説

歴史、とりわけ「中世」や「騎士道」をめぐる言説に「フィクション性の指標」としての推量的な表現を意図的に混入し、記述の在り方を侵犯するこの特異な運動は、バタイユの生涯を通じて見られるものである。1922年に発表された古文書学校の卒業論文『騎士の位階』第四章「詩篇の使用目的」の時点で既に、歴史的な言説において実証的な事実を離れるという、後年の『ジル・ド・レ裁判』に見られるようなバタイユ独特のエクリチュールの萌芽が見られる。

道徳的な詩篇や聖人伝はしばしば教会において朗読された。敬虔なコントも同様にそうされていたに違なからう。実証的な理由があるわけではないが、仮説としては、『騎士の位階』の使用目的はこのようなものであったと結論付けることにしたい<sup>(28)</sup>。

この『騎士の位階』をめぐる「実証的な理由があるわけではない」推量をはるか後年の、ギユスターヴ・コーアンの著作に対する書評として書かれた「中世フランス文学、騎士道道徳と情熱」(1949年)においても同じ形で残っている。

『騎士の位階』は後期の一段階を代表し、また恐らくギユスターヴ・コーアンが指摘する以上の重要性をこの作品に帰する必要があるだろう。(……) この短い詩篇についてギユスターヴ・コーアンが言っていないこと、それはこの詩篇が恐らく説教師たちによって推奨され、利用されたであろうということである<sup>(29)</sup>。

推量や留保の表現を挟みながら、中世の一韻文作品への解説という枠を侵犯し、それが実際に歴史のなかでいかなる役割を果たしたのかという点で想像力を飛翔させるこの独特な「歴史記述」の言説の様相は、古文書学校の卒業論文というキャリアの最初期から、前節で比較的詳細に指摘した

ような最晩年の『ジル・ド・レ裁判』に至るまで、バタイユの生涯を通してつきまとったものと考えられる。こうした想像力の奔放かつ侵犯的な飛翔ぶりは、バタイユの事実上の処女作『ランスのノートル・ダム大聖堂』（1918年）の熱っぽい信仰心と愛国心に満ちた記述——とりわけジル・ド・レと対をなすべきジャンヌ・ダルクのランスでの戴冠式における栄光の姿のロマネスクな描写<sup>(30)</sup>——に既に色濃くあらわれていたはずだ。ドゥニ・オリエの指摘するところによれば、ジャンヌ・ダルクの列席のもと戴冠式が行われたこのランスのカテドラルという「記念碑 (monument)」が秩序立てるのは、母性によって象徴的に去勢されることで永遠のものとされた父性のイデオロギー的な体系である。そしてオリエはさらに、この処女作において隠蔽された「父の遺棄」というトラウマティックな体験を『息子』（1943年）などの作品で取り上げなおすことで、バタイユが単なる父殺しの秩序ではなく、むしろ「教会、カテドラル、記念碑といった母なる身体、母胎に対して犯される攻撃」へと転換していくのだと指摘する<sup>(31)</sup>。

オリエが指摘する、バタイユにおけるこの「ジャンヌ・ダルク的＝母性的＝建築的＝記念碑的」な歴史観をめぐる大きな転換劇は、それ以降の「歴史」あるいは「中世」「騎士」をめぐる言説にも大きく関係していると考えられる。若きバタイユにジャンヌ・ダルクの勇姿を想像力豊かに描写させた侵犯的なエクリチュールの性向は、そのまま180度転換されることで、最終的に『ランスのノートル・ダム』のジャンヌ・ダルクと対をなす、瀆聖的で反＝母性的にして反＝記念碑的なジル・ド・レ像を描き出す筆へと帰結するのである。

こうしたカテドラル的＝記念碑的な歴史記述の言説を裏切っていくバタイユの運動の軌跡は、ミシェル・フーコーが『ニーチェ、系譜学、歴史』（1971年）で歴史の「パロディ的用法 (l'usage parodique<sup>(32)</sup>)」と呼んだものとも恐らくは通じている。フーコーによればこれはニーチェが『反時代的考察』で「記念碑的な歴史 (histoire monumentale)」と呼んだものに対置される。記念碑的な歴史とは「生成のいくつかの偉大な頂を復元し、それらを永遠の現存のうちに保持し、作品や行為や創造をそれらの内奥の本質のモノグラムに従って再発見することを任務とする」、「ひたすら崇拜をこととする」ような歴史であり、「生の現在の強烈さとその創造行為との道をふさぐ」という点で非難されるべきものである。こうした歴史上のさまざまな記念碑が結局は「絶え間なく立ち戻ってくるさまざまな仮面」であることを看破したうえで、「再びあらわれてくる無数のアイデンティティのうちで私たちを非現実化」するというパロディ作者的な作業によって、元の記念碑的な歴史自体もまた一個のパロディに過ぎないということを白日のもとに晒すのが、フーコーのいう「歴史のパロディ的用法」である<sup>(33)</sup>。この「記念碑的な歴史」とそうした歴史の「パロディ的用法」による転覆あるいは侵犯という図式はそのまま、オリエが指摘した、ランスのノートル・ダム大聖堂というカテドラル、あるいはそこで戴冠式を行ったジャンヌ・ダルクといった「記念碑」的にして母性的なるものに対するバタイユの転換と軌を一にしている。それは内容やモチーフの面——たとえばいささか俗っぽく「ジャンヌ・ダルクからジル・ド・レへ」とでも要約しうるような——だけにとどまらず、本稿でわれわれが見てきたような「虚構記号」の混入という、フィクション的な指



標によって歴史記述を侵犯するようなバタイユの異様な言説の在り方にもそのまま通じていると言えるだろう。それ自体が一種の「記念碑」として構築されるべき正統＝アカデミックな歴史記述のなかに、推量表現に代表されるような異物を混入することで言説を攪乱し、錯綜させるバタイユの手つきは、まさにフーコーが言う「パロディ作者」のそれとっていい。そしてこの「異物の混入」という形態をとった言説上の侵犯行為は、単にアカデミックな言説に対立する一個のパロディとしてアンチ＝アカデミズムの言説を構築するといういわば「記念碑的」な帰結を拒み、元々のアカデミックな歴史をめぐる言説自体もまた一個のパロディにまでおとしめる運動である。

こうしたバタイユによる「歴史のパロディ的用法」のダイナミックな侵犯運動が顕著にあらわれているのが『ドキュマン』創刊号に発表されたその名も『アカデミックな馬<sup>(34)</sup>』（1929年）なる論考である。このさほど長からぬ論考は一見すると、当時のバタイユが専門にしていた古銭学の知識を背景として、正統的＝アカデミックな姿で描かれるギリシャの貨幣における馬の図像と、反対に極めて醜悪な姿で描かれたガリアの貨幣における馬の図像とを比較したものと読まれる。しかしこれもまた、アカデミックな「ギリシャの馬」にアンチ＝アカデミックな「ガリアの馬」を単に対置するだけのものではない。バタイユは蜘蛛や河馬といったより「醜い」動物を引き合いに出したうえで、ガリア人がそうした「醜い」動物ではなくして、あくまでギリシャ人と同じ馬を描くことで引き起こしたその「古典的な馬の崩壊」こそが「規則を侵犯し、暗示にふりまわされて生きるこの民族の怪物的な心性の正確な表現を実現させる」のだという<sup>(35)</sup>。

この論考を取り上げて西谷修は、『アカデミックな馬』というテキスト自体がやはり言説の次元でも「アカデミックな」言説を侵犯する、いわば一個の「ガリアの馬」にそれ自体なっているのだと解釈する<sup>(36)</sup>。「有効で流通力がありひとに理解されそのことで役に立つ「アカデミック」な言説<sup>(37)</sup>」という「端正な形式を模倣しそれを侵蝕することで、秩序にとっての否定性としておのれを表示するという、この倒錯した表現の二重性こそは、形式としての表現とは縁のない闇の力が表現のうちにみずからを浮上させる固有のしかたなのである<sup>(38)</sup>」と西谷は述べる。しかしこの種の運動をフーコーが「歴史のパロディ的用法」と呼んだのに対し、西谷はこう言う。

言説を「アカデミック」たらしめる原則を見さかいなしに過剰適用され、その足場を踏み外して本来の額面の機能に破綻をきたしたこの言説は、しかしながら読む者の口から「パロディ」といういささか便利に過ぎることばを引き出して用済みになるたぐいのものではない<sup>(39)</sup>。

バタイユのテキストを駆動させているある種の運動に対して「パロディ」という——バタイユ自身も『太陽肛門』をはじめとする著作で使用した——語彙をあてはめることが妥当かどうか、という議論はまた別の場所に譲るほかないが、少なくとも西谷はここでパロディという語彙に代わるものとして（『言説の怪物』という表題からもわかるように）「怪物」という言い方をしている。これは『アカデミックな馬』においてバタイユ自身がたびたび「ガリアの馬」を呼称するのに用いてい

る *monstre* という語<sup>(40)</sup>を借りたものであるが、ここでわれわれはバタイユが同じく「怪物」の呼称を当てはめた歴史上の人物形象のことを想起せずにはいられない。『ジル・ド・レ裁判』におけるジル・ド・レその人である。

バタイユは彼に「聖なる怪物 ( « *monstre sacré* » )」という呼称を賜った<sup>(41)</sup>のを皮切りに、その序文中でしばしばジル・ド・レのことを「怪物」と呼称し、またそのジル・ド・レ解釈を特徴付ける「小児性 (*enfantillage*)」を指摘する際にもこれを「怪物性 (*monstruosité*)」と言い換えている<sup>(42)</sup>。これまで検討してきたように『ジル・ド・レ裁判』序文そのものが、フィクション性の指標を混入することで一般的な歴史記述という「端正な形式を模倣しそれを侵蝕することで、秩序にとっての否定性としておのれを表示する」テキストだったことを鑑みれば、その「足場を踏み外して本来の額面の機能に破綻をきたした」性格から、『アカデミックな馬』と同様、この著作にもやはり西谷の「言説の怪物」という呼称を適用しうるだろう。その意味でこの『ジル・ド・レ裁判』という著作（とりわけその序文）は、ジル・ド・レという怪物的人物を扱った「怪物の言説」であるのと同時に、そのテキスト自体が常にアカデミックな歴史記述を侵犯する運動に彩られた「言説の怪物」でもあったのである。

## 注

- (1) 西谷修「言説の怪物——「アカデミックな馬」読解」、『離脱と移動』せりか書房、1997年、247-267頁
- (2) Jean-Pierre Le Bouler, « Georges Bataille, le Moyen ge et la chevalerie. De la thèse d'École des chartes (1922) au Procès de Gilles de Rais (1959) », in *Bibliothèque de l'école des chartes*, 2006, Volume 164, no 164-2, pp. 539-560 なおこのテキストは Web ([http://www.persee.fr/articleAsPDF/bec\\_0373-6237\\_2006\\_num\\_164\\_2\\_463709/article\\_bec\\_0373-6237\\_2006\\_num\\_164\\_2\\_463709.pdf](http://www.persee.fr/articleAsPDF/bec_0373-6237_2006_num_164_2_463709/article_bec_0373-6237_2006_num_164_2_463709.pdf)) で PDF ファイルとして閲覧可能。
- (3) « À propos de l' « intérêt pour le Moyen Âge » de Bataille, Denis Hollier parle même de « métamorphose », et en situe l'époque : « Tout porte à penser, écrit-il, que c'est au lendemain de sa soutenance de thèse (“presque au sortir de l'École”) que son intérêt pour le Moyen Âge a changé de couleur, qu'il est passé du Moyen Âge évangélicisé de la littérature chevaleresque à un Moyen ge primitif, païen et sanguinaire. » », *Ibid.*, p.54
- (4) Pierre Savy, « Le Procès dans l'histoire, l'histoire dans le Procès », in Laurent Ferri et Christophe Gauthier (dir.), *L'Histoire bataille. L'écriture de l'histoire dans l'œuvre de Georges Bataille. Actes de la journée d'études consacrée à Georges Bataille (Paris, 7 décembre 2002)*, Paris, École des chartes, collection « Études et rencontres de l'École des chartes », 2006, pp.85-98
- (5) *Ibid.*, p.87
- (6) *Ibid.*, p.91
- (7) « Bataille écrit en outre l'histoire de Gilles en empruntant à des formes littéraires : on lit ainsi que Gilles de Rais fut un « personnage de comédie », et il sera plus tard maintes fois question de la « tragédie » de Gilles. Bref, que

l'on aille vers la légende ou vers le théâtre, on est hors du registre de l'histoire. », *Ibid.*, p.92

(8) *Ibid.*, p.93

(9) *Ibid.*, pp.94-97. サヴィが取り上げるバタイユ独自の知見として、特に、ジル・ド・レをゲルマン系のベルセルキールの系譜に位置付けたこと、キリスト教や宮廷風恋愛、騎士道道徳といった中世後期の社会的背景のなかでとらえようとしたこと、ジルの犯罪と信仰との間の矛盾を「救し」という点から解消したこと、といった点は、ル・ブーレの議論とも通ずるところがある。また、規範を逸脱した小児的＝怪物的人物としてジル・ド・レを描くバタイユの慧眼を評価しつつも、規範のなかに生きる凡庸な人間にもまた怪物性は宿りうるとしてハンナ・アーレントのアドルフ・アイヒマン論を持ち出して反論するなど、バタイユのこの著作について触れた数少ない文献のなかでは最も真摯にその議論と向き合っているという点で、サヴィの論文には一定の評価がなされてしかるべきだろう。

(10) *Ibid.*, p.98

(11) *Ibid.*, pp.92-93

(12) Denis Hollier, « La tragédie de Gilles de Rais au Théâtre de la Cruauté » in *L'Arc Bataille*, Duponchelle, 1990, p.77

(13) « Traité en ami, peut-être en amant (mais nous ne pouvons en être certain), François Prelati, dès d'abord, multiplia les énonciations, sans le moins du monde s'embarrasser de l'obstination d'un diable résolu à faire défaut. », Bataille, *Œuvres complètes*, tome X, 1987, p.332 (以下 *O.C.* と略記する)

(14) « Henri et Poitou, plus jeunes, avaient peut-être un charme : leurs dépositions sont vivantes..., et surtout nous savons que Poitou, qui avait été l'amant de Gilles, était beau. Mais ces garçons étaient des rustres et il est logique de penser que Prelati qui, peut-être, de son côté, s'offrir aux étreintes de son maître, lui donnait, lui, les satisfactions qui tenaient à sa culture. », Bataille, *O.C.*, tome X, pp.335-336

(15) Bataille, *O.C.*, tome X, p.334

(16) « Sans doute, il s'assayait sur le ventre de la victime et de cette façon, se maniant, il répandait sur la mourante la semence de vie ; mais ce qui lui importait était moins de jouir sexuellement que de voir la mort à l'œuvre. », Bataille, *O.C.*, tome X, p.278

(17) Jean-Marie Schaeffer, *Pourquoi la fiction?*, Seuil, 1999, pp.263-265

(18) 野家啓一『物語の哲学』岩波現代文庫、2005年、207頁

(19) 前掲書、227頁

(20) Hayden White, "The Value of Narrativity in the representation of reality" in *The Content of the Form*, The Johns Hopkins University Press, 1987, pp.3-4, p.25

(21) « Une telle chambre fut réservée à l'horreur dans l'énorme forteresse de Champtocé. Peut-être son grand-père venait-il d'y mourir? Peut-être achevait-il de mourir un peu plus loin? », Bataille, *O.C.*, tome X, p.308

(22) « Ces sollicitations doivent être rattachées moins au genre douteux de la « biographie romancée » qu'à la série des moments homologues qui se retrouvent dans presque tous les autres textes de Bataille et mettent en scène à travers diverses variations ce qu'on pourrait appeler une *mort incestueuse*. », Hollier, *op.cit.*, p.78

(23) Arthur Danto, "Analytical Philosophy of History" in *Narration and Knowledge*, Columbia University Press, 2007, p.143

(24) *Ibid.*, p.159

(25) 野家、前掲書、85頁

- (26) Bataille, *O.C.*, tome X, pp.281-285
- (27) Bataille, *O.C.*, tome X, p.300
- (28) « Des poèmes moraux et des vies de saints étaient fréquemment lus dans l'église. Des contes pieux ont dû l'être également. Il n'y a pas de raison positive, mais des présomptions, pour conclure que telle était la destination de l'*Ordre de Chevalerie*. », Bataille, *O.C.*, tome I, p.101
- (29) « *L'Ordene de Chevalerie* représente une étape ultérieure et il faut sans doute lui attribuer plus d'importance que ne fait Gustave Cohen. (...) Ce que Gustave Cohen ne dit pas de ce poème, c'est que sans doute il fut prêché, utilisé par les prédicateurs. », Bataille, *O.C.*, tome XI, p.513
- (30) Bataille, « Notre-Dame de Rheims » cité par Denis Hollier dans *La prise de la Concorde*, Gallimard, 1993, pp.36-37
- (31) Hollier, *La prise de la Concorde*, p.51
- (32) Michel Foucault, *Dits et Écrits*, tome II, Gallimard, 2001, p.152
- (33) *Ibid.*, p.153
- (34) Bataille, *O.C.*, tome I, pp.159-163
- (35) Bataille, *O.C.*, tome I, pp.161-162
- (36) 西谷、前掲書、261 頁および 263 頁を参照。
- (37) 西谷、前掲書、254 頁
- (38) 西谷、前掲書、257 頁
- (39) 西谷、前掲書、255 頁
- (40) Bataille, *O.C.*, tome I, p.161 et 162
- (41) Bataille, *O.C.*, tome X, p.279
- (42) Bataille, *O.C.*, tome X, pp.301-302